



発行 栃木市 総合政策部
蔵の街課

地と 第2号 2020[令和2]年9月15日発行

地と
栃木県 栃木市
二〇二〇 夏号
02

代街謝の

土蔵の周囲に組まれた
足場を見上げると
身軽に動き回る職人達の影
遠い日の面影を残す建物
今を生きる人々の生活
それらが混じりあい
魅力的な時が流れています



通りを風が吹くたびにカタカタと鳴る見世蔵のガラス戸の前を、この街で暮らす老若男女をはじめ様々な人々が行き交います。その様子は、昔も今も変わらず続いて来ているものなのでしょう。

文化財のまち

歴史的な建造物が数多く残る嘉右衛門町とその周辺地区の町並みは、平成二四年三月に栃木市の指定する伝統的建造物群保存地区(以下伝建地区)となりました。同年七月には国の重要伝統的建造物群保存地区(以下重伝建地区)に選定(*され、人々の生活の場でもある町並みが国の貴重な文化財として認められています。

戦後の日本社会がめまぐるしく変化する中で、多くの歴史的な建造物が失われていきました。そのことに危機感を抱いた市民らによって全国各地で市民運動が起こり、自治体独自で町並みを保全する条例を定める動きが相次ぎました。伝建地区制度は、こうした自治体の活動を後押しするために昭和五〇年に創設されました。それから約半世紀、伝建地区を取り巻く環境はさらに変化し続けています。少子高齢化などで空き家が増加する一方、リノベーションといった言葉が耳慣れしてきたように、古くとも味わいのあるものが再評価され新たな需要も生まれています。

文化財であり、観光資源でもある歴史的な町並みを保存しながら、時代と関係する人々の暮らしや需要に合わせた「生きたまち」としていかに活用するかが伝建地区の新たな課題となっています。

時を建てる人々

嘉右衛門町伝建地区を含む蔵の街は、その歴史的価値が着目されてから今日まで数多くの建物調査が実施されました。そして今、先人たちの蒔いた想いの籠った種が、街のこれからを考える新しい動きとして萌芽しつつあります。今号では、嘉右衛門町伝建地区に関わってきた方々にお話を伺い、それぞれの想いや役割、伝建地区のこれからについて考えていきます。



*:重要伝統的建造物群は市町村の申出により、国によってその価値が認められた地区を指す。全国で120ヶ所選定されている。(令和2年6月現在)

かつて、長いアーケードに覆われていた大通りの町並み
そこに隠された歴史的価値に注目し
「蔵の街」と呼ばれる今日へ導いたのが、河東義之さんです



文 川ナオミ

アーケードに隠れた町並み

私が栃木市の調査を始めたのは昭和五二年の夏のことでした。小山高専の教員として赴任し、せっかく栃木に来たので何かこの地域に関する調査をしようと思ったのがきっかけです。学生達を連れ巴波川周辺の古い建物の調査から始めました。

数年後、市の依頼を受けて大通りの建物調査を本格的に始めることとなりました。当時、駅前から伸びる大通りは、戦後まもなくつけられたアーケードに覆われ、歩いている目線からでは古い町並みが多く残っているように見えても見えませんでした。ある時、栃木グランドホテルや第一勧業銀行(現：

みずほ銀行 栃木支店)の屋上に上がらせてもらい、街を見下ろした際にあたりに広がる瓦屋根の多さに大変驚いたのを覚えています。

「蔵の街」になるまで

この調査では二年間で約一八〇棟の実測調査を行いました。始めのうちは建物調査に難色を示す人が多かったのですが、協力してくれる家を調べていくうちに、徐々に取り組みが新聞などで取り上げられるようになり、調査を始めて二年目になると「うちはまだかい？」と声をかけてくれるようになりました。私や学生が屋根裏に登って、煤けた格好で降りてくると、着替えのシャツとスイカが準備してある、なんてこともありました。

調査の実績を踏まえて、市は大通りのアーケードや歩道橋を撤去し、町並みを整備する事業に着手しました。アーケードに関しては、当初は多くの住民が撤去に反対していました。特に西向きに店を構えた商店にとっては西日の問題もあったようですが、多くの商店は建物の傷みが露呈してしまうことを気にしたのでしょう。栃木商人のプライドもあったのではないのでしょうか。説明会を重ね、理解も少しずつ得られた結果、アーケードや歩道橋は撤去され、電線は地中化されました。歴史的な建造物の所有者は市の補助金を活用し、建物の修景が進められ、大通りの町並みは今の姿になりました。このころになると、まちに関連する市民団体がいくつもできていて、市民の方々の意識にも変化が見られました。嘉右衛門町の調査を行ったのは大通りの調査がひと段落してからのことでした。調査を継続し実績を積み上げたことで、蔵の街として人々に認知されるようになり、重伝建地区に値する価値ある町並みとして評価されたのだと思います。■

河東義之 [かわひがよしゆき] 建築史家。小山工業高等専門学校名誉教授。栃木市の歴史的町並みに光を当てた第一人者。



平成元年頃のアーケードがあった大通り(写真上とアーケードを撤去し、町並み修復事業を行った大通り(写真下))



天保8年(1837)板木町並板木統新田村々絵図



板木町(大通り周辺)・嘉右衛門町周辺の調査をまとめた資料(河東氏所蔵)



古くから残る建物は

街が代謝してきた証でもある



歳を修理する

残すことで 伝えるもの

嘉右衛門町伝建地区において
伝統的建造物は修理・保存することが前提
この地を切り拓いた岡田家には
保存しなくてはならない建物が数多く存在する

文：遠藤 百合子

岡田家の歴史とともに 建てられた建物

天正年間「1573-1592」にこの地に移り住み、開墾した岡田家。江戸時代には幕府領として敷地内に陣屋が置かれ、回漕問屋として商売を行っていた。明治期には酢と油の製造、石灰業を創立。現在は「岡田記念館」として敷地内に残る見世蔵、床屋、木造店舗、旧陣屋、土蔵八棟（うち二棟は店舗利用）、翁島別邸を公開している。古いものは江戸時代末期に建てられたものだが、土や木を素材とする建物は時間とともに朽ちてしまう。

岡田記念館の館長であり二六代当主岡田嘉右衛門氏の母・陽子さんに、建物を残すことの苦労や想いを伺った。「残すというのは本当に大変なこと。特に伝建地区はルーや工事も特別。時間や費用も多くを費やさねばならない」。伝統的建造物として特定された建物の修理には八割の補助金が出るが、残り二割は自己負担。その負担額は蔵一棟につき高級車が一台購入できるほどの額だ。現在、岡田家では土蔵一棟、木造建築一棟を修理しているが、これから直さなければならぬ建物が多くある。全て直したら何年で、いくらかかるのだろうか、と想像しただけで身震いするが「しょうがないわよ、伝建地区なんだから」と割り切る陽子さん。古い建物を後世へ残すことへの誇りもさることながら、伝建地区だから残さなければならぬ、という岡田さんの潔さが痛快であった。

五年の歳月をかけ甦る土蔵

現在、岡田記念館の門をくぐると、正面に修理中の土蔵が目に入ってくる。二〇一八年に調査を始め、二〇二〇年時点では基礎と骨組み、屋根ができている状態だ。完成は二〇二二年の予定だといふ。

「正面で目に付くところだから、いつまでも修理しているのが嫌なの。早く直してほしいわ」とこぼす岡田さんだが、土蔵の修理に携わる大工の田村さんについては「若いのに、本当に良くやってくれている。田村さんにお願いすれば、すぐ動いてくれるの」と笑顔で話してくれた。一棟の建物でも完成までにおよそ五年もの歳月がかかる。その間、大工とはずっと付き合っていかなければならない。大工と良い関係を築くことも施主の様々な負担を少しでも減らすことに繋がるのかもしれない。

初めて挑む 土蔵の保存修理

岡田家の土蔵修理には、大工、左官、屋根など多くの職人が関わっている。現場指揮を取るのが大工の田村英敏さん。これまで多くの新築や古民家改修に携わってきたが、蔵の修理は初めて。若手職人を育てる学びの場「NPO法人とちぎ蔵の街職人塾」に所属したことがきっかけであった。崩れそうな土蔵を初めて見た時は嘸然としたという。困惑や不安は大きかったが「何とか直してやろう」と気持ちを奮い立たせた。二〇一八年、建築士とペアを組み、蔵の再建に着手した。

古い蔵の修復に 携わるといふこと

作業工程は調査から始まる。どのような現状になっているか図面に起こす。そして保存修理のための解体をするのだが、この作業だけで一年かかった。伝統的建造物ではできるだけ元の材料を使い、当時のやり方で再建しなければならぬ。細部を確認し少しずつ解体していかなければ元に戻せないのだ。

「途絶えた技術を再び甦らせたい」と話す田村さん。小屋裏に四本の梁があるが、二本は朽ち果て、作り直しが必要であった。「機械で加工すれば一日でできますが、当時の職人は手彫りな訳ですよ。その痕跡を見たら自分もやらなきゃと思って」。鉦を使い四日かけて一本の梁を作った。「初日は腕がパンパンに張り、筋肉痛で気が



右: 鉦(ちやうな)は先代の父が作った道具を引き継いで使っている。
左: 複数の刃形を使い分ける鑿(のこ)も、使いやすいうように常に刃を研ぎ手入れをしている。

持ち悪くなりました。それでもめげずに作業を進めるうちに慣れていった感じです」。

なぜそこまでするのか尋ねると「当時の技術が本当に凄くて。何でもこんな丁寧に美しくできるのかって、いつも感嘆しています。当時の技術から学ぶことも多く、刺激を受けているという。こだわった点を聞くと「全てで、初めての挑戦なので、常に調べて考えています」という職人らしい答えが返ってきた。「現在は耐震など、当時の概念に無いものがあるため、昔と変えねばならない点もあります。耐震に必要な金物をいかに目立たなくするか、工夫を凝らしていますね」。

全てが挑戦だという蔵の保存修理は、自身のターニングポイントになっているという。完成した暁には、ぜひ立派な外観だけでなく、職人の技術と知恵が詰まった細部にまで目を凝らしてほしい。📍



創建当時の梁に書かれた墨書。次の改修時に年代特定ができるよう田村さんも梁の仕口に改修年度を書き残した。

田村英敏【たむらひでし】 栃木県栃木市生まれ。専門学校卒業後、建設業に就職。その後、父の会社(有限会社田村建築)で学ぶ。現代表取締役。嘉右衛門町伝建地区の空き家の改修・利活用に取り組む「かえもん暮らし」のメンバー。

途絶えた技術を紐解き

新しいことを学ぶ



かき杖に刻んだ柱竹を乗せ壁の下地を組む。縦横に組まれた竹の結び目は数千にも及ぶ。



伝建地区に建つ築150年の見世蔵を改修し
オリジナルブランドのアクセサリーを中心とした
セレクトショップ「Lydie tells a small lie」を営む
牛山美樹さんの嘉右衛門町暮らし
文=小野悦子

歴史が呼吸する心地よさ

昔からのづくりが好きで、アクセサリは二〇歳から独学で作っていました。もともとは茨城県古河市出身で、高校卒業後は一〇年ほど職を転々とし、一番長く勤めたのがショーウィンドウの大道具を手がける会社。若い頃から絵画のような平面よりも立体の造形が性に合っていたんです。その後一旦は古河市に戻って実家を改装し、カフェを営みつつ自分の作品を販売していましたが、二〇〇〇年に縁あって栃木市の沼和田町に移住。環境が変わってもアクセサリの制作を続けたいという気持ちは変わらず、作品を届けるためにも自分のお店を持ちたいと思っていました。

嘉右衛門町との出会いは、二〇一〇年にオープンした「scals apartment」を訪れたことがきっかけです。「お洒落な古道具屋さんができた」と聞いて足を運んでみたら、この通りだけ古い町並みが日常に溶け込み、ゆったりとした独特の空気が流れていて……。ちょうど個人店がぼつぼつと増え始めた時期で、これから面白くなりそうな予感があったので、店主の大塚さんに物件を探したいと相談しました。その矢先、知人からこの見世蔵の大家さんを紹介してもらい、「一目見て即決でした。当初は廃屋のような状態でしたが「こんなに古くてカッコいい家が借りられるんだ！」とワクワクしていましたね。それこそ大道具のセットを作るような感覚で、仲間に手伝ってもらいながら改修を進め、二〇一二年にお店「Lydie tells a small lie」を開店しました。

実際に暮らしてみると、湿度が高めで夏は暑くて冬は寒い。不便に感じることもありましたが、人間のDNAに組み込まれている本能なのか、木の温もりや家全体が呼吸している感じが伝わってきて、とても落ち着くんです。今は何でもスタイリッシュに整えられている時代ですが、家のあちこちに作り手の遊び心が宿っていて、うちのようなポップな内装でもすんなりと馴染む。長い年月を重ねてきた建物ならではの包容力ですよね。街の皆さんも地域の活動についての教えてくださったり、娘の成長を喜んでくださったり。「あの変な髪の人、誰？」なんて驚かれることもなく、適度な距離感であたたかく見守ってくれて、懐が深いなあつて。

「遊び」のある街びくへん

嘉右衛門町でお店を営む仲間たちも魅力的で「楽しいことはどんどんやろう！」という勢いとエネルギーの持ち主ばかり。街の歴史を大切に守りつつ、それぞれの個性をしっかりと出していて、真剣に遊んでいるから面白い。全国から出店者やお客さんが集まるイベントなども仲間たちと共に開催しました。

伝建地区に指定されてから街全体が本格的に動き始めて、外からも注目が集まっています。これまでの枠組みに囚われることなく、新しいことにも積極的に取り組んで、住んでいる人も訪れる人も楽しめる街にしていきたいですね。

Lydie tells a small lie
栃木県栃木市嘉右衛門町1-6 Tel:0282-22-5315



世界中を旅してきたという夫の選んだとしても居心地の良い街。
「完成しないからこそ、変化を受け入れる余裕」と可能性がある。今後も個性豊かなインテリアスポットが増えればと期待しています。



味噌工場の あゆみ

嘉右衛門町伝建地区の中心部から
やや北に位置する旧味噌工場
「ヤマサみそ」と書かれた煙突は
昔も今も地域のランドマークとなっている

文 | 遠藤百合子



蔵をはじめ、多くの建物が並ぶこの場所は、かつて日本一の生産高を誇る味噌工場であった。

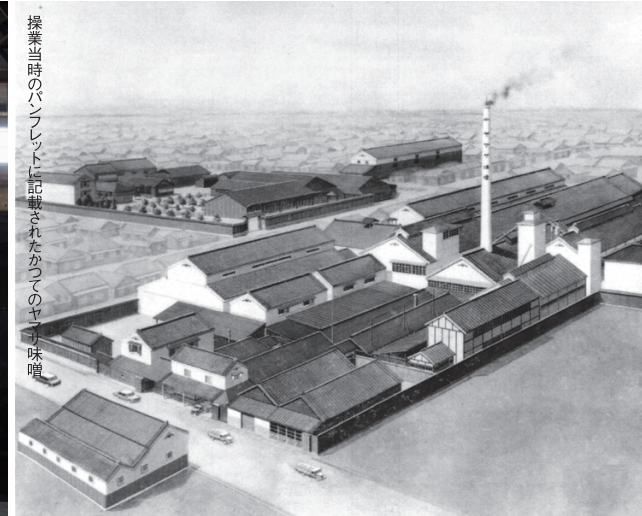
「ヤマサ味噌」と呼ばれていたその場所は天明元年〔1781〕、初代・益子佐平がこの地で繊維業を営むところから始まる。回漕業、為替業、絞油製造販売、酒造業、肥料業などを経て、味噌醸造業に転換したのは明治中期五代目のとき。大正中期には味噌の速醸技術が発展し、日本の味噌醸造は近代化の時代を迎えた。ヤマサ味噌もいち早く速醸技術を取り入れ、大量生産体制を構築。その後、大正二年〔1923〕の関東大震災により東京の業者が生産停止になったことで、販路は関東一円へ拡大。第二次世界大戦中〔1939-1945〕には軍需味噌指定工場となり、海外へ送る特殊味噌の需要が生まれたことで更に用地を広げ生産を拡大。しかし時代の変化とともに日本人の食生活も大きく様変わりし、味噌の消費量は減少の一途を辿る中、平成二三年に廃業となった。

当時の賑わいを再び

操業当時、旧日光例幣使街道沿いは馬車や大八車（木製の人力荷車）の往来が目立った。栃木駅から味噌工場へ大豆を運ぶものや、出来上がった味噌を売りに行くものである。「戦後は食べ物が不足していたから、運搬途中で袋からこぼれる大豆を子どもたちが貰いに行っていたよ」。旧味噌工場の隣で洋品店を営むぜにやの店主は、幼少期の思い出を振り返る。「とにかく味噌が売れていたから、早朝から稼働していたと思うよ。大豆、麦、米を蒸して麴を混ぜるんだけど、この辺りは蒸している香りがかなり漂っていて、今でもその時の香りは覚えているよ」という。また、味噌樽を作る場所、樽を洗う場所が近辺にあり、その辺りは子ども達の遊び場にもなっていて、工場近辺が人の活気で溢れていたことが、近隣の皆さんの話から伺える。

旧味噌工場の敷地内には伝統的建造物が数多く残る。栃木市は、観光・まちづくり、防災の拠点として整備を進め、今後ガイダンスセンターや飲食店、多目的スペースとして活用していく予定だ。

さまざまな人が集い、地域の魅力を知り、楽しめる場所として生まれ変わる。再び、子ども達の笑い声が聞こえ、活気のある場となる日が待ち遠しい。



操業当時のパンフレットに記載されたかつてのヤマサ味噌





こだわりがゆきとどく隅まで

見て欲しいところはたくさんあります。「一番どこに力を入れましたか？」と聞かれたら「隅から隅まで全てです」と答えます。難しかった点を挙げると、拠点施設の北側は旧日光例幣使街道がカーブしています。それに合わせ建物の屋根瓦も少し斜めになっているのですが、瓦一枚のサイズを変えることはとてもできない。そのため、瓦の位置を計算して少しずつずらしています。これは大変でした。建物内部では、昔の和室をそのまま残したところがあるのですが、障子の紙にもこだわりました。新築の家であれば真っ白な障子を張るでしょうが、昔懐かしい香りが漂う部屋に真っ白な障子は違和感があります。この部屋に馴染む、もともと張ってあったかのような紙を全国の和紙から選びました。また、引き戸のレールを見てほしいのですが、レール部分だけ色が異なるんですよ。もともとの色に合わせて塗ることもできますが、文化財修理の考え方として、「ここは直したところ」とわかるように、あえて塗らずにそのまま残すんです。

このように、古いものをただ直す訳ではなく、より良いものを作るために常々考えています。職人としての技術があつて、そこに知識が加わって経験を積んで得られる知恵を足していく。昔造られたものを、今の時代ならどうやるのがベストかなと常々考え、やってみること（より良いものができると思っています。ここに来られた方が「あ、この施設は何かが違うな」と、違いを感じ取れるような造り方を心がけています。

拠点施設への想い

隅から隅まで手を掛け考え抜いて造っている、細部まで見てもらいたいと思います。災害などへの対策もしっかりとっている、防災拠点としても活用できます。地域にお住まいの方、観光客の方、様々な世代の方に喜ばれる場所になれば、職人冥利に尽きますね。取材の間、常に目を輝かせながら熱心に話をしてくださった兵一さん。「父は情熱担当なので」と要所要所で冷静に話をしてくれた剛久さんとのやりとり。仕事上でもお互いを尊重し、補い合い、より良いものを作ることに結びついているのだらうと感じました。



手前の新しい屋根瓦が現在修理中の部分。隣りに奥の建物も今後の修理を進めています。

嘉右衛門町伝建地区拠点施設の修理を請け負うのは地元栃木市の有限会社大兵工務店です。代表の山本兵一さんと息子の剛久さんにお話を伺いました。

平成元年、嘉右衛門町にある「油伝味噌」さんから田楽を食べられるお店を作りたい、と相談を受けました。田舎風の造りで趣があり、ほっとできるような空間にしたくて、味噌樽の底版を解体した古材などを使い、新しいのに、懐かしく落ち着く雰囲気の間ができました。その後「栃木市ふるさと景観賞」で前述の油伝味噌店舗を始め、自分が手掛けた建物が表彰されることになり、文化財に対する想いが高まってきました。先人がやったことを自分たちが知恵や工夫を施して甦らせるというのは、やりがいがあること。栃木市には古い建物がたくさん残っていますから、建物や歴史・文化を継承するために「NPO法人とちぎ蔵の街職人塾」や「うだちの会」といった団体の立ち上げに関わり、若い世代の学びの場を作っています。

最高を造るため 日々考える

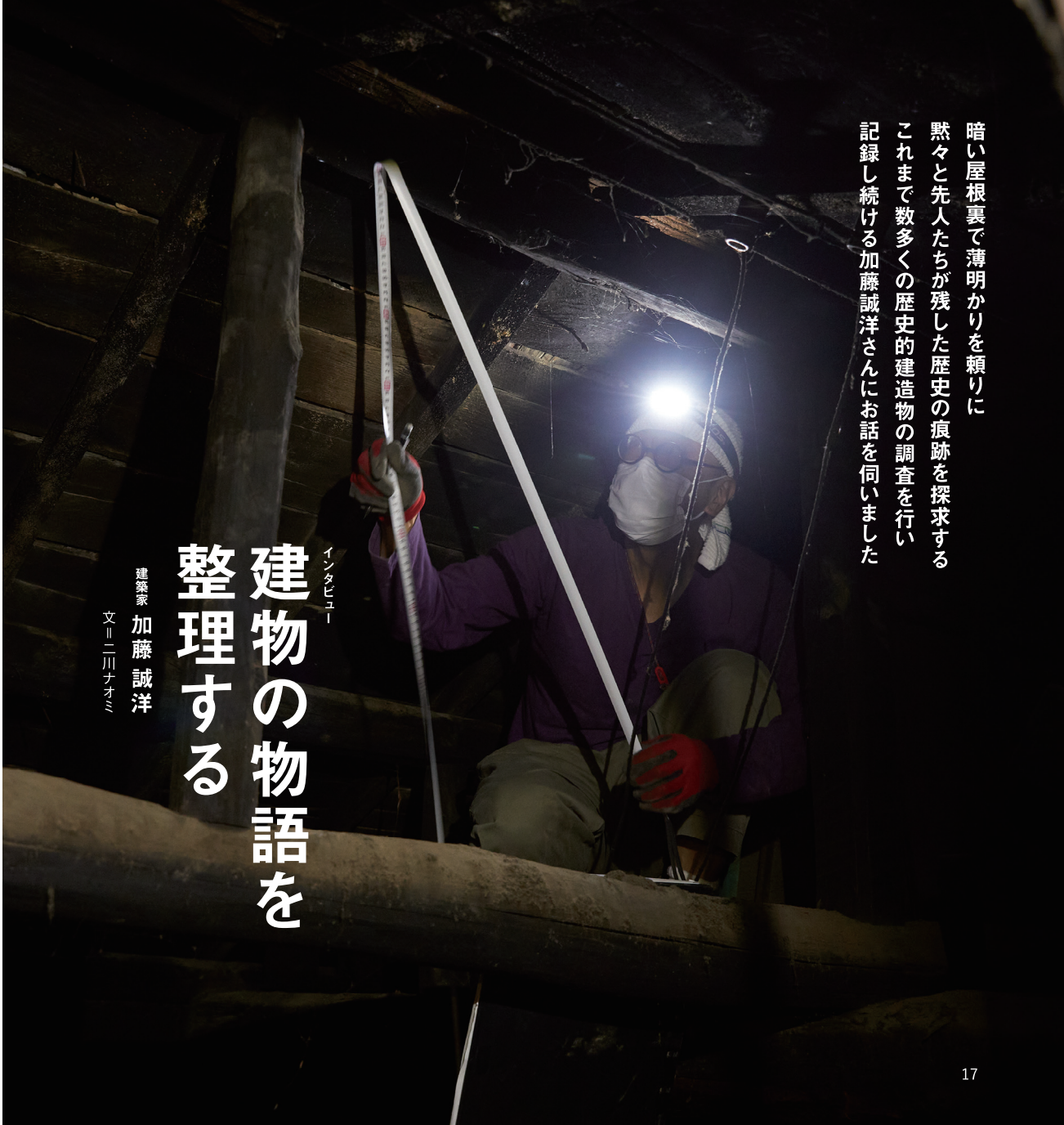
今手掛けている拠点施設の整備は、これまで手掛けてきた修理の中では一番大きな事業。「プレッシャーを感じませんか」と聞かれますが「どうすればできるかな」とそればかり考えています。大工には「やるうとやる度胸」と、自分に任せろと言われ「はったり」のようなものが重要です。目の前の壁を恐れるのではなく、壁にぶつかってから考える。そうやって日々仕事に取り組んでいますし、常に「日本の最高峰を造る」それくらいの気持ちでいます。一緒に工事に携わっている皆に「ただものを造っている訳じゃない。将来、子や孫が見に来た時にこれはじいちゃんが造ったんだぞ、と誇れるものを造ろう」と日頃から言っています。それでも失敗することは沢山ありますし、やりながら失敗して学ばなくてはなりません。今までやってきた経験を活かせる仕事があるから、そこに自分の知恵を足してやり方を考える。昔の工法を、今の時代ならどう直すのがベストなのか、ひたすら考えることが面白いんです。逆に考えることがないようだと寂しいくらい。考えて考えて…でも考えすぎると眠れなくなってしまうので、寝る時は考えないようにしています。



山本兵一「やまとひょういち」 栃木県栃木市生まれ。高校卒業後、親の元で大工の修行を始める。1973年に「有限会社大兵工務店」を設立。現在、嘉右衛門町伝建地区拠点施設の修理を手掛ける。令和元年度文化庁長官表彰受賞。 daihyou.com

山本剛久「やまとたかひさ」 栃木県栃木市生まれ。大学卒業後、宮大工の修行に出る。25歳の時、父の営む「有限会社大兵工務店」に入社。宇都宮城の築城に携わる。（一社）日本伝統建築技術保存会 棟梁認定。

暗い屋根裏で薄明かりを頼りに
黙々と先人たちが残した歴史の痕跡を探求する
これまで数多くの歴史的建造物の調査を行い
記録し続ける加藤誠洋さんにお話を伺いました



建物の物語を 整理する

インタビュー

建築家 加藤 誠洋

文 二川 ナオミ

嘉石衛門町に関わるきっかけ

旧日光幣使街道沿いの空き家となった建物。
押入れの崩れた壁の一部からのぞくのは太平洋
戦争直前の昭和一六年八月の新聞紙。埃を被った
薄暗い天井裏で、わずかな明かりを頼りに、何かを
探す人がいます。
建物に使われている木材や煤汚れの跡など、増改
築の「痕跡」を探しては記録し、建物の歴史を紐解
くのは、長年にわたり歴史的建造物を調査してきた
建築家の加藤誠洋さん。古い建物の調査や伝建地区
のこれからについてお話を伺いました。

僕は小山高専の卒業生で、建築史家である河東
義之先生の研究室に所属していました。先生の教え
子として、建物調査に参加したのをきっかけに、その
後三〇年以上、この町の調査に携わり続けています。
高専卒業後、家業を手伝いながら、茨城県古河
市に設計事務所「のぶひろアーキテクト」を構えま
した。永らく僕の事務所を支えてくれるスタッフの
羽部も、同じく河東先生の教え子であり、学生の頃
よりこの町の調査研究に関わっています。しばらく

の間、茨城と栃木を行き来しながら調査をしていた
のですが、二〇一七年、空いていた長屋の一角を改装し、
歴史的建造物の調査や活用を考える拠点として
事務所分室を嘉石衛門町伝建地区に開設しました。

古い建物を調べるということ

築一〇〇年以上の建物の調査をしていると、外側
から見ただけではわからない来歴を知るための手
がかりのようなものを発見する時があります。今の
時代に生きる人の誰もが見たことのないものを自分
の目で発見するたびにとてもワクワクします。実測
の方法に決まりはありません。過去の調査手法など
を参考にしながら進めます。

古い建物の調査は柱や基礎、材料、壁や屋根の
煤け具合といった「痕跡」をたどる調査、写真や絵図、
文献などの資料調査に加え、建物や周辺の歴史を
知るご高齢の方へのヒアリング調査などを行います。
事務所分室に遊びにきた近所の方たちと話し込んで



一日が終わるなんてこともあります(笑)。調査の過
程では対象となる建物の建築年代や改修された頃
の出来事、流行といった時代背景や、全国の類似す
る事例との比較等を行います。
歴史的建造物の調査とは、その建物の秘めた物
語を整理し、後世に残す作業だと考えています。

街の代謝を考える

伝建地区であるこの街は、歴史的建造物を地域の
資源として残すための基礎が整っている場所です。
制度ができて約半世紀を超え、時代と共に変わる
人や暮らしを感じとりながら、建物を元の形に直
して残すだけでなく、愛着を持って使ってもらえる
よう工夫することも必要です。

過去が生み出してきた価値を大切にし、時代に
合わせ新しい価値を付加し、継承していく。少しづつ
町を代謝させながら、未来の歴史を築いていくこと
が今後ますます重要になっていくでしょう。📍

時間が生み出す価値を護りつつ 街を代謝させていく

かえもんの人たち

若手の職人や建築士が集まる「かえもん暮らし」の仕掛け人である
国土舘大学横内基准教授に
お話を伺いました。

文=二川チオミ



横内基准教授（前列中央）と「かえもん暮らし」のメンバー。建築士大工研究者・WEB制作・エンジニア・都市計画プランナーなど、職種は多岐にわたる。

夕方、仕事帰りの車や人たちが行き交う頃。のびひろアーキテクトにポツリ、ポツリと人が集まってきました。時折、笑い声が響く和やかな雰囲気の中、活動報告や浮かび上がる課題など様々な意見が飛び交います。楽しそうに街のこれからについて考えるのは伝建地区を中心とした建物の活用を提案するグループ「かえもん暮らし」の皆さんです。

地域の防災とまちづくり

自身の専門は耐震や防災で、東日本大震災の被害調査が栃木市に関わるきっかけでした。調査を通じて地域の方々と交流が深まるにつれ、この地域の防災力を上げるには建物の耐震性能の強化だけでは不十分だと考えるようになりました。むしろ、いざという時に住民がお互いに助け合える仕組みを強化することが重要になると思うようになったのです。それをきっかけに、栃木市の伝建地区の防災を考えるプロジェクトがスタートしました。取り組みの一環として空き家調査や活用に向けたワークショップを実施しました。活動は好評でしたが、



かえもん暮らしの活動

プロジェクトの期間が終われば活動も終了せざるを得ません。そのためプロジェクト後半にはまちづくりの担い手育成活動を組み込んだりもしましたが、なかなか上手くはいきませんでした。そうこうしているうちに、どんどん空き家は増えていきますし、地域の防災力も低下してしまいます。一方で古くとも味わいある物件のニーズも増えてきました。ますます、伝建地区の橋渡しの役割が必要になる中、NPO法人とちぎ蔵の街職人塾の方々に呼びかけたところ若手の数名が関心を示してくれました。そうした経緯で二〇一八年に「かえもん暮らし」が発足しました。

かえもん暮らしでは、手始めに地区内のどこに空き家があるか調査しました。空き家の活用を意識的な所有者と物件に興味のある方を集め、一緒に物件を見ながら、どのような活用方法が考えられるか話し合うイベント「かえもん暮らし発見会」を開催しました。これをきっかけに改修の方向へ動いている物件もあります。私や加藤さんの事務所への相談も増えてきました。今では人手が足りなくなっています（笑）。メンバーには本業がありますし、かえもん暮らしとしての表立った相談窓口はまだないのですが、少しずつ成果を出しながら、長い目で街にとって良いと思われる形を考えたいと思います。

関わる人々の想いと、技術、知恵によって護られながら、時代に即した代謝をし続けていることもまた、嘉右衛門町伝建地区の魅力なのかもしれません。



旧日光例幣使街道に、街のこれからの考える声と灯りがこぼれます。

まちづくりはひとづくり

嘉右衛門町伝建地区まちづくり協議会

文＝遠藤百合子



毎月、第一日曜日の朝七時。嘉右衛門町伝建地区の中央に位置する神明神社に、人々が集まってくる。地区内で活動する「嘉右衛門町伝建地区まちづくり協議会」のメンバーだ。この日は月に一度の清掃活動「クリーン作戦」の日。時間ほどかけて伝建地区内を一周し、ゴミを拾う。参加者は毎回一〇名を超え、年齢層は三〇代〜七〇代と幅広い。活動に共感し、協議会員以外の住民も参加するようになった。

ゴミ拾いが目的だが、参加者同士のコミュニケーションを楽しみに参加している方も多い。「この花は何という名前かな」「(工事中の建物を見て)だいたいできてきたなあ」そんなやりとりが常に聴こえてくる。「地域に栃木県内唯一の伝建地区があることを誇りに思います。私はこの地が地元ではないのですが、皆さんが受け入れてくれて、顔なじみの方が増えることが本当に嬉しい」会員になって三年という村田さんは笑顔で話す。

協議会の立ち上げは平成二六年。年を経るごとに「花いっぱい運動」や「そば三昧」などイベントを増やし、認知度や関わる人が増えている。会長を務める杉戸さんは「少しずつ私たちの活動に興味を持って、関わってくれる人が増えるのはありがたいこと。今後はより地域のために動ける人を育てたい。私たちは伝建地区を守っていかないといけないから」と語る。

まちづくりはひとづくり。協議会の活動を通じて、伝建地区に関わる人や、まちの価値を上げていく人たちが増えることを願う。



昭和初期、師走の風景。年明けに控えた初荷の準備で、人々が慌ただしくしています。現在も変わらず残る建物の前を通るたび、その時代の残り香をどこか感じます。絵／小春あや coharuaya.com

編集蔵話

「地と」第二号では嘉右衛門町伝建地区を護る人たちに焦点を当てた。古い建物の所有者、そこに住む人、研究者、建築士、職人様々な人たちによってこの町並みは護られている。これらの人たちは「見ると、どこか素敵で、格好よく映るかもしれない。しかし、取材を通してイメージからは想像もつかないような苦労、努力、遅しき、様々な裏側を知ることができ、そのような部分を皆さんにお伝えできればと思った。今回の取材では多くの方に話を伺ったが、共通して感じたのは「自分さえ良ければいい」そんな考えを持った人は一人もいなかったことだ。建物や町並みを残すことは「大変だ」「不便だ」という言葉はたくさん聞いた。しかし大変さや不便さ乗り越え、誰もが建物や町並みを護ることの大切さを尊重し、それを受け入れている。一人一人の想いや行動が、今の嘉右衛門町伝建地区をつくり上げているのだ。建物だけでなく、そこに関わる人によって護られている場所だからこそ変化もする。今後、時代とともにこの地域がどう変化を遂げていくのか、楽しみでもある。

地と

第二号 二〇二〇 夏号

発行日 2020(令和2)年9月15日発行

発行／栃木市総合政策部 蔵の街課
〒328-8686 栃木県栃木市万町9-25
電話／0282-21-2571

編集アートディレクション：ザイン / i D
撮影 / アラタケシジ
絵 / 小春あや

取材・執筆 / 遠藤百合子 / 二川ナオミ / 小野悦子
印刷・製本 / 第一印刷株式会社
本誌内容の無断転記・記載・複写を禁じます。

© 地と all rights reserved.